

# 今後のグローバル教育と ケンブリッジ英語検定

昨今、コロナ禍で停滞していた国際交流に回復の兆しが見られます。そうした中で、海外研修旅行や、留学生の受け入れを再開させる学校も増えているようです。

また、学習指導要領の改訂や、第4期教育振興基本計画などを背景に、英語による発信力の向上をめざした、英語教育改革が進んでいます。

そうした状況で、今後のグローバル教育—英語教育、国際交流、海外大進学支援、英語検定試験など—をどう進めていくのか。4校の事例を見ていきます。

併せて、世界標準の英語力を評価できる検定試験「ケンブリッジ英語検定」をご紹介します。

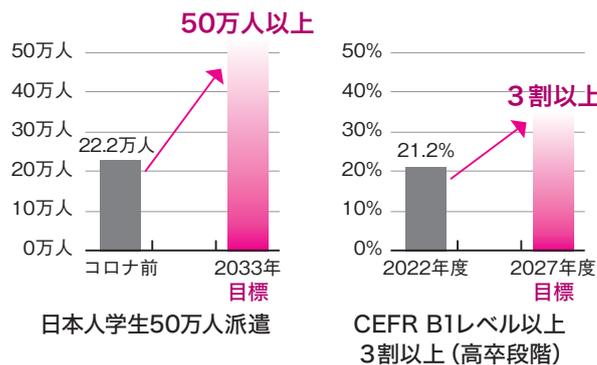
## CONTENTS

### Part 1 今後のグローバル教育の方向性 ..... p43

世界基準の  
英語力の必要性

英語による  
発信力の強化

#### 教育振興基本計画の目標



#### 学習指導要領改訂



英語によるやりとり、  
即興性の重視

### Part 2 取り組み事例 ..... p48

#### 各校の取り組みのポイント

##### 開成中学校・高等学校

- CLILを導入。環境問題や脱炭素社会など多様なテーマを扱う。
- セミナール形式で学ぶ「英語科特別講座」
- カレッジカウンセラーが常駐し、海外大進学を支援。
- 約半数の生徒が卒業までにTOEFL iBT® 80に到達。

##### 高槻中学校・高等学校

- ケンブリッジ大学出版局の教科書を活用。
- ディスカッションやペアワークを中心としたオールイングリッシュの授業を展開。
- ティーチャートレーナーのコンサルテーションを受け、授業改善を推進。

##### 山梨学院中学・高等学校

- グローバルイシューの議論などを通じて、英語で発信する力を養う。
- 多様な国・地域からの留学生が約80名在籍。
- 海外留学を促すため、セメスター制を導入。

##### 札幌日本大学 中学校・高等学校

- 「世界に貢献する人材の育成」をめざして探究型学習に注力。
- オーストラリアの姉妹校から、毎年留学生を受け入れ。
- 普段の授業でも、生徒が英語で発信する活動を増やす。

\*CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）とは、言語運用能力を評価する国際指標であり、初心者のレベルである「A1」から熟達したレベルである「C2」まで6段階の評価指標がある。

## Part 1 今後のグローバル教育の方向性

## 今後のグローバル教育の方向性

Point

- ✓ 高校卒業段階でCEFR B1以上3割が目標に
- ✓ 「英語によるやり取り」「即興性」による発信力強化が重視される
- ✓ 世界標準の検定試験を通じて「使える」英語力の育成を!

### 数値目標を設定しグローバル教育を促進 高校卒業段階でCEFR B1以上3割が目標に

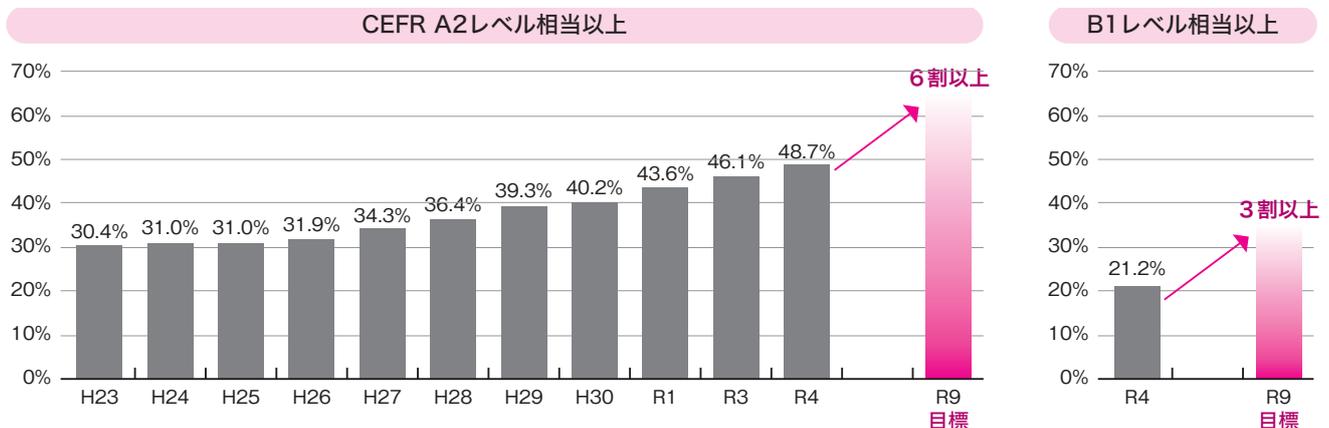
今年6月、第4期教育振興基本計画が閣議決定された。令和5～9年度（2023～2027年度）の教育振興の方向性を示したもので、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトとしている。

この計画の特徴は、16の目標それぞれについて、基本施策と達成指標が示されていることである。

「目標4：グローバル社会における人材育成」については、「日本人学生・生徒の海外留学の推進」「外国人留学生の受入れの推進」「高等学校・高等専門学校・大学等の国際化」「外国語教育の充実」などを基本施策として、<図表1>に挙げたような指標が示されている。

注目されるのが、高校卒業段階の英語力の目標が、第3期計画の「CEFR A2レベル5割以上」から「6割以上」へと引き上げられたこと、B1レベル目標が新設されたことだ。

図表2 高校生の英語力



\* A2レベルは実用英語技能検定準2級、B1レベルは2級相当

※令和4年度英語教育実施状況調査、第4期教育振興基本計画を基に河合塾作成

令和4年度英語教育実施状況調査によると、高校3年生の英語力の現状は<図表2>の通り。A2レベル、B1レベルともに、現状よりさらに10ポイント前後高めようとしていることがわかる。

図表1 グローバル教育関連の主な指標

海外留学・国際交流関連【2033年まで】*	
• 日本人学生の派遣	50万人
高校等	12万人
大学・専門学校等	38万人
• 外国人留学生の受入れ	40万人
高校等	2万人
大学・日本語学校等	38万人
英語力関連 (CEFR相当)【2027年度まで】	
• 中学卒業段階でA1レベル相当以上	6割以上
• 高校卒業段階でA2レベル相当以上	6割以上
• 高校卒業段階でB1レベル相当以上	3割以上

\*内閣官房教育未来創造会議第二次提言「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ」を受けたもの

※第4期教育振興基本計画を基に河合塾作成

## 生徒の英語による言語活動や 教師の積極的な英語使用が求められる

令和4年度英語教育実施状況調査では、生徒の英語力に影響を与えるものとして、次のものなどが挙げられている。

- ・ 生徒の言語活動の割合
- ・ 英語教師の英語力や発話の割合
- ・ ICTの活用(発表や話すことにおけるやり取りをする活動)

さらに、CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が高い高校では、次の活動を行っている割合が高いとしている。

- ・ ICTを活用した言語活動
- ・ ALTによる授業外の活動

生徒の英語による言語活動を積極的に取り入れた、コミュニケーション能力重視の教育改革の必要性が、改めて強調されている<図表3>。

## 新学習指導要領で強調される 「英語によるやり取り」「即興性」の重要性

言語活動の中でも特に重視されているのが「話すこ

図表3 英語力向上に有効な取り組み



※令和4年度英語教育実施状況調査を基に河合塾作成

と」、とりわけ「やり取り」する力や「即興性」を育む取り組みである。

2022年度から学年進行で実施されている学習指導要領では、従来の4技能が<図表4>の4技能5領域に整理された。「話すこと」が「やり取り」と「発表」に分けられたことがポイントだ。

さらに、五つの領域を総合的に扱う「英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ」と、話すことと書くことを中心とした発信能力の育成を強化する「論理・表現Ⅰ～Ⅲ」がそれぞれ新設された。

その背景には、以下のような反省がある。

高等学校の授業においては、依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないこと、「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていない

※「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説」より

これらを受けて、英語の授業にディスカッションや即興スピーチなどを取り入れる学校なども増えている。合わせて、パフォーマンステスト<sup>(注1)</sup>の内容や、生徒の活動を評価するためのルーブリックや「CAN-DOリスト」を見直す高校も見られる。

図表4 言語活動の五つの領域と各科目の特徴



科目名	特徴
英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ	五つの領域別の言語活動と、複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を行う
論理・表現Ⅰ～Ⅲ	「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」を中心とした発信能力の育成を強化

(注1) パフォーマンステスト…知識や技能を使いこなすことができるかどうかを評価するためのテスト。

## 日本人学生の派遣50万人をめざし 海外留学・研修旅行等を推進

コロナ禍で停滞していた海外留学・国際交流にも復調の兆しがある。

冒頭で紹介した第4期教育振興基本計画の海外留学・国際交流関係の目標は、内閣官房の教育未来創造会議が今年4月に発表した「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（第二次提言）」を受けたものである。

提言を見ると、2033年に向けて<図表5>の目標が掲げられている。特に日本人学生の派遣は、コロナ前の倍以上となる50万人が目標となっている。さらに、目標達成のために、協定派遣（授業料相互免除）や給付型奨学金の拡充などに言及。今後の具体的な検討に期待したい。

ここ数年、コロナ禍や円安の影響で海外留学や研修旅行の機会は縮小傾向だったが、これらの支援も受けながら、今後は国際交流に一層力を入れる高校や大学が増え

ていくと予想される。

しかし、開成高校（p48）の記事で「TOEFL iBT® のスコア80（CEFR B2相当）が目安」と指摘されているように、海外の学生と学びを深めるには、高い英語力、特に英語で議論したり自分の意見を伝える力が求められる。

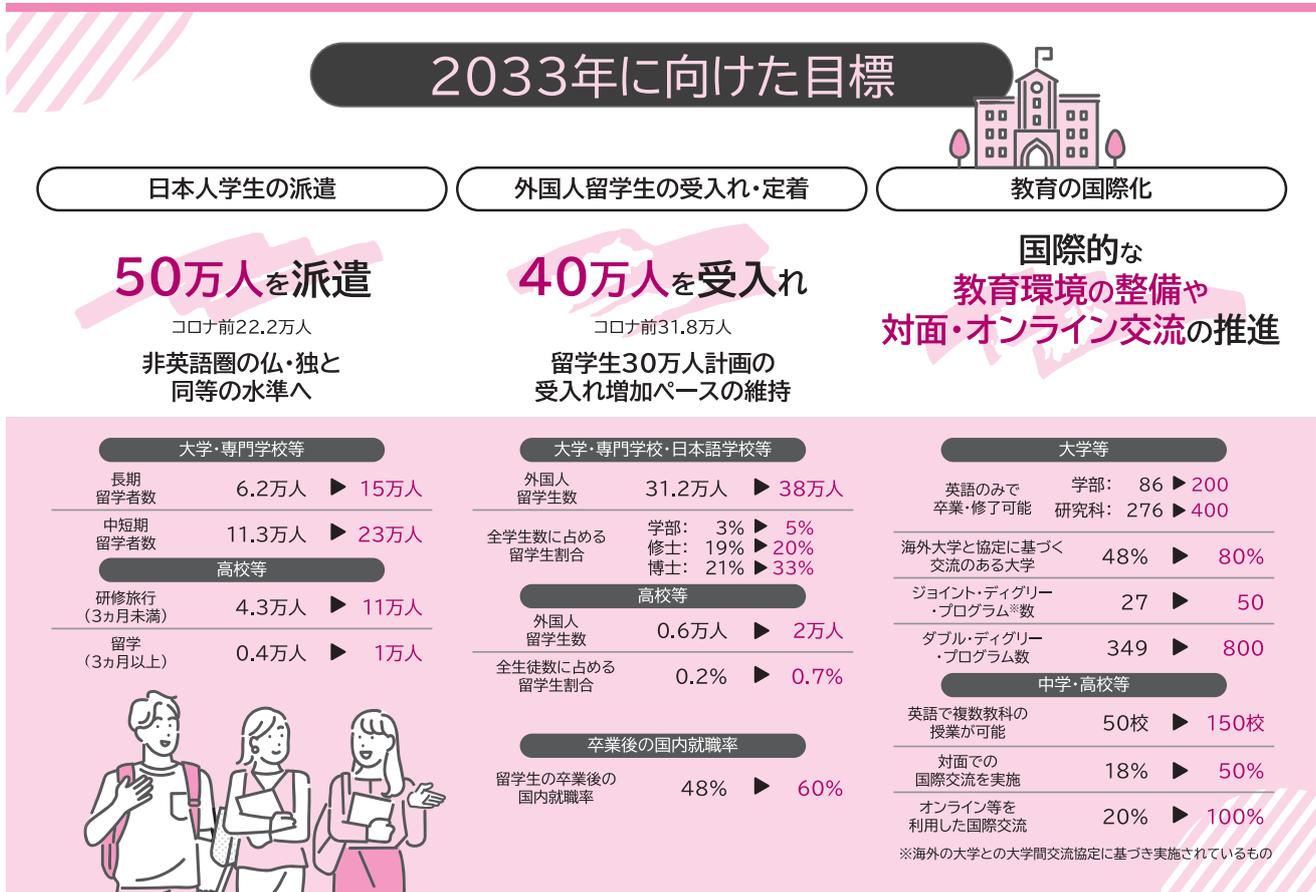
海外留学や研修旅行の機会を充実させるとともに、その前提としての英語力の強化が、ますます重要になる。

まとめると、グローバル教育に関する教育政策は、以下のような方向性で進んでいる。

- ・CEFRに準拠した英語力の向上
- ・「英語によるやりとり」「即興性」を通じた発信力の強化
- ・海外留学・国際交流の振興

高校ではこれまでも、これらを意識した教育が行われてきたが、今後さらに強力で推進していくことが求められるだろう。

図表5 海外留学・国際交流関係の目標



※内閣官房「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（第二次提言）」より

## 世界標準の検定試験を通じて 「使える」英語力の育成を!

生徒の英語による発信力を伸ばすためには、その目的に合致した検定試験を定期的に受検し、指導や学習に活用することが有効である。そこで河合塾は2018年に、英国・ケンブリッジ大学英語検定機構と共同で、一般財団法人日本ケンブリッジ英語検定機構を設立し英語教育を推進している。

ケンブリッジ英語検定の特徴は<図表6>の通り。中でも、対面ペア型スピーキング試験を全員受検としている点が、他の検定試験にはない特徴である。受検者2名がペアになって試験に臨み、受検者同士のやり取りを含めて評価する。新学習指導要領で重視されている、「英語でのやり取り」「即興性」を評価するうえで、最適の検定試験である。

また、初歩～社会生活レベルまで、学習者の学習段階に合わせて試験を選択することができる<図表7>。

受検者の「問題の質・内容」に対する満足度は82.6%<sup>(注2)</sup>

と、多くの方にご満足いただいている。さらに、『4技能すべてが鍛えられる良質な問題』『単語力より、実用性・応用力を重視しているテスト』『世界で求められている英語のレベルを実感できた』などのコメントも多数いただいている<図表8>。

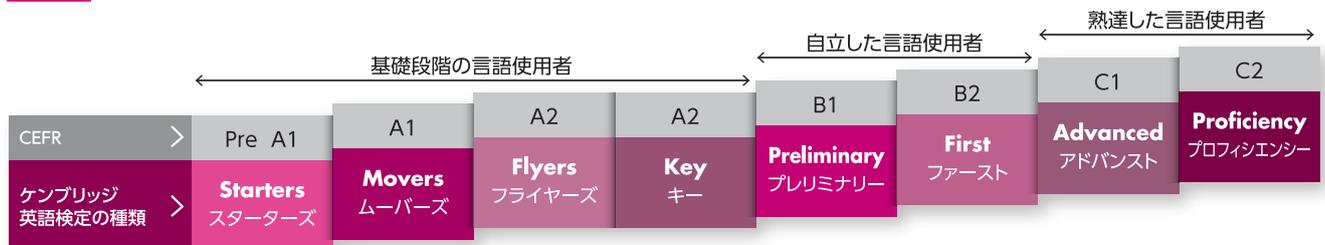
学習指導要領との親和性もあり、近年は入学者選抜で利用する大学も拡大傾向である。

ケンブリッジ英語検定の詳細や、大学入学者選抜での利用大学等については、下記のWebサイトをご参照いただきたい。

図表6 ケンブリッジ英語検定の特徴

1. コミュニケーション力重視の英語検定
2. CEFRに完全準拠
3. 大学入試で活用できる4技能測定
4. 実践的な対面ペア型スピーキング試験(全員受検)
5. 学習段階に合わせたレベル別選択受検
6. 学習指導要領との親和性

図表7 学習段階に合わせたケンブリッジ英語検定の種類



### ケンブリッジ英語検定の詳細はこちら

ケンブリッジ英語検定専用サイト [河合塾]

[www.kawai-juku.ac.jp/cambridge-english/](http://www.kawai-juku.ac.jp/cambridge-english/)

試験日程、申込方法等を掲載  
4技能CBT「リングスキル」もご案内

河合塾 ケンブリッジ



お問い合わせ先 河合塾ケンブリッジ英語検定事務局 ☎ 03-6811-5520 (平日 9:00~17:00)

(注2) 2020年度に河合塾で実施した公開試験を受検した方へのアンケートで「問題の質・内容」について「大変満足」「満足」と回答した方の割合。

図表8 ケンブリッジ英語検定受検者の声 (開成高校)

実践的な英語の使い方が問題で問われ、文の内容を想像しながら読む力を観察できている良い検定

とてもウィットに富んでいる。文章やストーリーが面白かった

他の検定と違い、コミュニケーション能力を測れる

ライティングは想像力がかなり求められていて時間内に要素を書き切ることが難しかった

実力がついた気がした

聴く、話すという行為の身体能力性に気づいた

話すのが楽しかった

現地で使える能力を測っていた

本当に適性を測る良い試験だったと思いました。配られた手引きなども参考にしつつ、英語力を上げていきたいと思ういいきっかけになりました

世界を知れた

実力を測れるふさわしいテストに感じた

スピーキングが大変だったが、楽しんでできたので良かった

資料 各資格・検定試験とCEFRとの対照表

CEFR	ケンブリッジ英語検定	実用英語技能検定 1級-3級	GTEC Advanced Basic Core CBT	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEIC L&R/ TOEIC S&W
C2	230 200 (210) (230) C2 Proficiency			9.0 8.5				
C1	199 180 (190) (180) C1 Advanced	3299 2600 (3299) 2630 1級	1400 1350 (1400)	8.0 7.0	400 375	800	120 95	1990 1845
B2	179 160 (170) (160) B2 First	2599 2300 (2599) 2304 準1級	1349 1190 (1280) (2304)	6.5 5.5	374 309	795 600	94 72	1840 1560
B1	159 140 (150) (140) B1 Preliminary	2299 1950 (2299) 1980 2級	1189 960 (1080) (1980)	5.0 4.0	308 225	595 420	71 42	1555 1150
A2	139 120 (130) (120) A2 Key	1949 1700 (1949) 1728 準2級	959 690 (840) (1728)		224 135	415 235		1145 625
A1	119 100 (110) (100) 各試験CEFR算出範囲	1699 1400 (1699) 1456 3級	689 270 (270) (1400)					620 320

▶ は各級合格スコア

※括弧内の数値は、各試験におけるCEFRとの対象関係として測定できる能力の範囲の上限と下限

※文部科学省資料 (平成30年3月) より

## 全生徒にCEFRのB2レベル以上を期待 早く英語を身につけるとその後の可能性が広がる

### 開成中学校・高等学校

Point

- ✓ 英語をアウトプットする機会と環境を作ることが大切
- ✓ 実用性高いケンブリッジ英語検定を高1全員が受検
- ✓ カレッジカウンセラーが個別指導や進路相談にも対応



野水勉 校長

英語科  
高崎朋彦 先生

#### 7時間目に毎日開講する「英語科特別講座」により 英語力に磨きをかける

全国屈指の進学校である開成中学校・高等学校は、グローバル人材の育成に力を入れており、近年は毎年10名前後が海外大に進学する。野水勉校長は、2020年4月に校長に着任した際、生徒たちの英語力の高さに驚いたという。

野水校長は「生徒たちの英語力の高さは想像以上でした。本校にはネイティブの教員が2名、非常勤講師が6名いますが、ネイティブの先生だけでなく、日本人の先生方もどんどん英語を使って授業をされているのを見て、英語力を伸ばす環境が整っていると感じました」と話す。

開成高校のグローバル教育の内容を見ていこう。特徴的なのは、毎日7時間目に高1～高3の希望者を対象に実施している「英語科特別講座」である。15名ほどのゼミナール形式で実施しており、アカデミック・ライティングのほか、英語に親しむためのカジュアルな内容の講座や、海外大に進学するためのトレーニング講座など多彩な講座が設けられている。

英語科の高崎朋彦先生は「5月中旬から希望者を募りますが、抽選となることもあります。本校の場合、100名ほどは高校からの入学生となりますが、そのうち15%ほどが帰国生であり、もっと英語力を伸ばしたいという高い意欲を持つ生徒が多く見られます。その生徒たちの姿に、周りの生徒も刺激を受け、切磋琢磨しています」と話す。

#### 授業はすべてアウトプットにあて コミュニケーション能力を育成

週6コマ実施される通常の英語の授業でも、ネイティブ教員と協力してCLIL<sup>(注)</sup>を取り入れ、環境問題や脱炭素社会など多様なテーマを扱った授業を行う。また、授業はディスカッションやスピーチなど実践的なコミュニケーション能力の育成を重視している。

高崎先生は「アウトプットは周囲の反応が重要であり、自分ひとりでは難しいため、インプットは各自が行い、限られた授業時間を使ってアウトプットを行っています」と話す。

また、高1の11月には学年全員がケンブリッジ英語検定を受検する。リスニング、対面でのスピーキングテストが最も実用に近いこと、合否ではなくスコアで英語力を測ることなどから英語科が推薦し、5年前から採用されている。「高校からの入学生に比べると、中学からの入学生は入試でも英語が課されておらず、高1段階での英語力には差がありますが、英語科特別講座の受講やケンブリッジ英語検定の受検などを通じ、学年全体で英語力を高めていきます。また、生徒がケンブリッジ英語検定を受けた感想をその後の授業にも生かしています」(高崎先生)

#### カレッジカウンセラーやカレッジフェアなど 充実した海外大進学・留学の支援体制

海外大進学やサマースクールへの参加、留学を希望す

(注) Content and Language Integrated Learningの略称。教科科目やテーマの内容(content)の学習と外国語(language)の学習を組み合わせた学習(指導)の総称。

**図表** 開成高校のグローバル教育

概要	取り組み内容
方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後から押すが、前からは引かず</li> <li>・担当の専門家をあえて作らない</li> </ul>
体制	①国際交流・留学委員会 ➡各種企画、情報収集、情報提供、交流支援等 ➡英語科を中心に、各学年1名+委員長+カウンセラー ②海外進学カウンセラー ➡個別面談、進路相談、教員作成推薦状の翻訳等
情報発信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Google Classroomによる情報共有</li> <li>・「海外活動申請書兼報告書」の作成・共有</li> <li>・カレッジフェア（7月）、サマースクール報告会（10月）、トビタテ説明会（12月、4月）の実施</li> <li>・外部カレッジフェア・留学フェアなどの情報提供、引率</li> </ul>
英語力向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語科特別講座</li> <li>・ケンブリッジ英語検定受検（高校1年）</li> </ul>

※開成高校提供資料を基に河合塾作成

る生徒に対する支援も充実している。同校では、2018年度よりハーバード大学出身のカレッジカウンセラーが常駐しており、現在は週3日、生徒や教員、保護者の相談等に対応している。教員に対しては推薦状の内容や翻訳、生徒に対してはエッセイの添削や海外大進学の相談などを行っている。

また、毎年7月にはカレッジフェアを企画し、アメリカ、アジア、ヨーロッパの大学OBや入試担当者を招き、模擬授業の受講や、ディスカッション、プレゼンテーション、個別相談などができる機会も設けている。

### 中高段階での英語力を上げ 将来の可能性を広げていくことが目標

こうした取り組みの結果、同校では、海外の有力大学へ進学するのに必要なCEFRのC1レベルに達する生徒が1割ほどいるという。

野水校長は「私は長らく名古屋大学で国際交流に携わってきましたが、交換留学で学生を送り出したくても、英語力が足りず派遣できないことが多々あり、もどかしく感じていました。アジアの諸外国と比較しても日本の大学生の英語のレベルは高いとは言えず、大学入学時点

で、交換留学の受け入れ条件とされることが多いCEFRのB2レベルに達している学生はほとんど見られませんでした。そのような中、中学で英語の勉強を開始した開成高校の生徒がCEFRのC1レベルまで到達するのは頼もしく感じます」と話す。

今後は、さらに英語力を伸ばす環境を充実させていきたいという。野水校長は「日本は海外への送り出しに課題があり、世界の中で日本の存在感が低下していることに危機感を抱いています。大学も留学する学生を増やそうと頑張っていますが、中学・高校の段階からもっと英語力を伸ばしていく必要があると思います。本校では、高校での交換留学を拡充し、送り出しはもちろん、留学生の受け入れにも力を入れるなど、さらに環境を整えていきたいと思っています。留学に来てもらうことで、周りの生徒たちももっと英語を話せるようになるのではないのでしょうか。本校の生徒は卒業時に約半数がTOEFL iBT® 80 (p47参照) のレベルに達していますが、すべての生徒に達成させてあげたいと思います。また、TOEFL iBT® 100まで届く生徒の人数も倍程度まで増やすなど、高校の段階で高い英語力を身につけてもらい、将来の可能性を広げてもらいたいですね」と期待を語ってくれた。

## 英語科教員にとっての大きなチャレンジ 新しい英語教育「高槻モデル」が学校を変え始めた

### 高槻中学校・高等学校

Point

- ✓ 中学1年生から学年進行で英語教育の改革が進行中
- ✓ 国際標準のテキストを用い4技能を育成する授業を展開
- ✓ 海外研修でも物怖じしない生徒の姿を見て成長を実感



国際教育部部長  
前田愛先生

英語科主任  
鈴木優子先生

#### 英語教育を大きく転換 4技能の向上に取り組む

高槻中学校・高等学校は大阪府にある私立の中高一貫校で、難関大学に合格者を多数出す進学校である。スクールミッションとして、「グローバルマインドを持った次世代リーダーの育成」を掲げている。同校は2014年度にSSH（第1期）、2016年度にSGHに指定されており、その頃から国際的に活躍できる人材を育成する進学校へ発展するため、グローバル教育に力を入れてきた。本格的にカリキュラムが変わったのは、2020年度に入学した中学1年生からである。そこから学年進行で現在、中学1年生から高校1年生までの4学年が「高槻モデル」と呼ばれる英語教育を受けている。

「高槻モデル」とは、ケンブリッジ大学出版局が編纂したテキストを用いたオールイングリッシュの授業で、ディスカッションやペアワークを中心に、英語4技能を向上させるものだ。また、同校は日本で初めてケンブリッジ大学出版局の「Better Learning Partner」の認定を受けた学校で、教員はケンブリッジ大学出版局から派遣されたティーチャートレーナーから定期的な助言・指導を受けつつ授業の質を保っている。英語科主任の鈴木優子先生は「ネイティブのトレーナーと、教材の使い方や授業の進め方について、ほぼ毎月ミーティングを行っています」と話す。トレーナーとのミーティングは、テキストのレベルにあわせて学年別に行われ、その中で、指導教員の困りごとへのコンサルテーションも行われている。

初年度から「高槻モデル」の授業を担当している鈴木

先生は「ケンブリッジ大学出版局から支援を受けながら、試行錯誤しつつ授業やカリキュラムを作っていました」とこれまでを振り返る。国際教育部部長の前田愛先生も「ケンブリッジのテキストを使いさえすれば、必ず目的に適った授業ができるというわけではありません。ミーティングを通してグローバルな英語力が身につく正道の教授法を学び、その教授法で授業を行うからこそ効果が出るのです」と話す。

#### 当初は戸惑いもあったが 徐々に結果が出始めた

テキストは、幅広い学術分野のトピックが扱われ、アカデミックスキルや批判的思考力を強化できるよう構成されている。鈴木先生は「私たちもこれまで触れたことがないような世界観でした。まず教員が勉強して理解し、授業で生徒たちに落とし込んでいくのですが、これが本当に大変でした」と教員にとっても大きなチャレンジだったと振り返る。

しかも初年度は不運にもコロナ禍の始まりと重なり、オンライン授業になった。さらに中学1年生は小学校までに培った個々の英語力の差も大きい。生徒たちにも戸惑いが見られたため、最初からオールイングリッシュの授業をすることは難しかったようだ。そのため段階的に進めていき、中学2年生からオールイングリッシュの授業を開始した。チャレンジのスタートは必ずしも順風満帆とはいえ、学年末のアンケートでも生徒の戸惑いが見て取れた。また、一部の保護者から「本当にこの方法で大学入試に対応できるのか」といった疑問の声が寄せられるなど、授業を担当する先生方には厳しい環境だっ

図表 高槻中学校・高等学校のグローバル教育

\*…任意参加

取り組み内容		対象				
		中1	中2	中3	高1	高2
「高槻モデル」による英語教育 <sup>(注)</sup>						
ケンブリッジ英語検定受験						
英会話(外部英会話学校と連携)						
英文の多読						
デュアル ディプロマ プログラム*						
スタンフォード大学オンライン講座*						
海外研修 プログラム*	ターム留学(中3・3学期)					
	次世代リーダー養成米国プログラム・プレコース(高1・夏)					
	次世代リーダー養成英国プログラム(高2・夏)					

(注) 2023年度は中1～高1生で実施。 ※高槻中学校・高等学校ホームページ(<https://www.takatsuki.ed.jp/education/global>)などを基に河合塾作成

た。しかし、方針がぶれることはなかった。

効果は徐々に現れ始め、模擬試験の成績等にも伸びが見られるようになり、生徒アンケートでも満足度が上がった。さらに興味深いのは、分野別の成績に変化が現れたことだ。

鈴木先生は「生徒はリスニング、ライティング、長文に対しては抵抗感が少ないようです。日常の授業で慣れているためでしょう。また、日本語を介さずに内容を理解するのでスピードも早い。やはり生徒たちは吸収が早く、私から見ても、考え方がネイティブに近いです」と話す。また、入試問題でよくある4択などの文法問題は多少間違えるが、多くの生徒は、文法問題を知識で解くのではなく、英文としての不自然さを判断基準としているそうだ。このあたりもネイティブに近い感覚なのだろう。新しい試みが軌道に乗ったとはいえ、日々さまざまな苦労がある。だが、鈴木先生は「授業に取り組む先生方の勇気と保護者の方々の理解があれば大丈夫です」と気負いが無い。

### 英語教育の改革をきっかけに 学校が変わり始めた

「高槻モデル」の導入により、生徒の積極性・発信力にも変化が見られるという。英語のスピーチコンテストやディベート大会、模擬国連などにチャレンジする人数が増えており、さらに海外研修の希望者も増えている。同校では高校1年生でアメリカ、2年生でイギリスに研

修に行くのだが、鈴木先生は今夏、高校1年生のアメリカ研修を引率して、生徒たちの成長を強く感じたそうだ。最初こそ遠慮が見られたが、生徒たちはリスニングについてはほぼ問題なく聞き取れており、さまざまな場面で会話を楽しんでいた。研修の最後に行う個々のプレゼンテーションではまったく物怖じせず、生徒の中にはジョークを交えた堂々たる振る舞いをする者もいた。「それは衝撃的でした」と鈴木先生は語る。

学年進行で「高槻モデル」が徐々に浸透することで、教員にも変化が生じているという。前田先生は「生徒たちの変化を感じることで、教員自身も変わってきていると実感しています」と語る。「その変化を起こしたのは『高槻モデル』を担当した先生方の勇気でありチャレンジです。まず英語科教員全体に意識の変化が生まれ、授業見学などを通じて徐々に他教科の先生方にも理解が広がっていると思います。考え方が大きく変わったと言う先生もいました」と英語教育の改革を機に、学校全体が変わり始めているという。

なお、同校では中学2年生と高校1年生で、定点観測として、ケンブリッジ英語検定を受検している。前田先生は「世界のスタンダードといえますので、CEFR B1やC2などの認定レベルは、大きな指標となっています」と話す。また、海外大学への進学を真剣に考えている生徒も複数出てきている。

最後に前田先生は「これからも改革を推し進め、生徒の可能性を広げる努力を続けていきたい」と語った。

## グローバルな環境で生きる力を育むのは教育の使命 語学教育のみならず日常の環境整備が大切な要素に

### 山梨学院中学・高等学校

Point

- ✓ 英語の読解力があっても発信力がなければ伝わらない
- ✓ 多くの留学生を受け入れ、ダイバーシティ環境を実現
- ✓ セメスター制で留学の受け入れと送り出しを容易に



吉田正 校長

#### 読み書きだけでなく 自分を発信できる力を育成

山梨学院高等学校は、1970年代に全国的に見てもいち早く英語科を設置するなど、英語教育や留学に力を入れて取り組んできた。グローバル教育に力を入れる背景について、吉田正校長は社会の変化を理由に挙げる。

「日本では少子化が進行する一方、かつて開発途上国だったアジア各国は経済的に大きく発展を遂げています。これからは国際社会に積極的に出て行って活躍できる人材でないと国を支えることはできないでしょうし、企業もそうした人材を求めるようになるでしょう」

また、国際社会で活躍するためには、発信力が重要であるという。吉田校長は「過去に留学した生徒から、『日本人は勤勉だが、ディベートとなるとうまく話すことができず、実際よりも能力を低く見られてしまう』という話をよく聞いていました。国際社会で活躍する人材を育てるには、読み書きだけではなく、自分の意見を発信できるよう育てなければいけないと思います」と話す。そのため、英語教育は4技能の育成を重視している。

同校は、高校からの入学者も多いが、山梨学院中学校との中高一貫・一体教育を行っており、4技能を重視する取り組みは中学校段階から始まる。

中学校の授業では、インタビューテストやトークタイムなど、ネイティブ教員とマンツーマンで対話する機会を設けることで4技能を伸ばしている。また、オーストラリアへの2週間と4週間を選択できる語学研修旅行など、授業で培った4技能を実践する機会も用意している。

高校の授業でも4技能重視は変わらず、「グローバル

イシュー」という授業では、あるテーマに沿って英語でディベートを行うなど発信する力を養っている。

そして、2年次にはケンブリッジ英語検定を受検する。ケンブリッジ英語検定を採択した理由について、吉田校長は「ケンブリッジ英語検定は4技能を重視していることと、ドメスティックな検定試験とは異なり、世界的にも非常に多くの受検者がいる点に魅力を感じました」と話す。

#### 多様な国からの留学生が 生徒の意識を変える

英語教育に加え、同校のグローバル教育の特徴として、海外からの留学生が多いことが挙げられる。それも特定の国に偏らず、欧米、中国に加え、インドネシア、ウガンダ、ケニア、ニュージーランド、トンガ、フィジーなど実に多様な国から留学生を受け入れている。現在、高校の留学生は約80名だが、全校生徒が1,100名いるうちの1割まで受け入れることが1つの目標だという。

これほどまでに多くの国から留学生を多数受け入れるのは、グローバル教育をする上でダイバーシティを重視しているからだという。

吉田校長は「外国に行けばいろいろな民族がいます。日本でも、人口が減少する中、国内にすでに多くの外国人が労働者として入ってきていますが、経済的側面からだけでなく、今後社会のあらゆる分野でより一層ダイバーシティが推進されていくでしょう。私はグローバル教育イコール英語教育ではないと考えています。英語は基本的ツールとして必須ではありますが、それ以上に英語を使ってどうやって多様な他者を理解し、コミュニケー

**図表** 山梨学院中学・高等学校のグローバル教育

取り組み内容	中学校	高校（系列により一部内容が異なる）
英語力向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネイティブ教員とのインタビューテスト、トークタイム</li> <li>・イングリッシュキャンプ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「グローバルイシュー」（英語ディベート）</li> <li>・ケンブリッジ英語検定受検（2年次）</li> <li>・イングリッシュキャンプ</li> </ul>
海外留学・海外進学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語学研修旅行（オーストラリア）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単位制・セメスター制 →留学（送り出し、受け入れ）が容易に</li> <li>・留学生の受け入れ（目標：全校生徒の1割）</li> <li>・海外大進学サポート</li> <li>・語学研修旅行（アメリカ・カナダ）</li> </ul>

※取材内容を基に河合塾作成

ションを取り、つながるかが重要なのです」と話す。

そして「ダイバーシティは、これからの社会を生きる今の若者たちに対する教育として大切な観点です。世界で活躍できる人材の育成には、高校時代から環境を整えなければなりません」と力説する。

実際、多くの国から留学生を受け入れている同校では、多様性を受容し協働する雰囲気があるという。

吉田校長は「現在ウガンダから来ている留学生は、生徒会の役員もしています。自分の横に違う国の人が出て、会話をしながら一緒に生徒会活動を行う。それが当たり前という教育環境こそダイバーシティの実現だと思います」と話す。

なお、同校はスポーツ強豪校でもあるため、プロスポーツ選手になる卒業生も多い。吉田校長は「彼らからは、海外でプレーする際はもちろんのこと、指導者となった場合の英語の重要性をよく聞いています。なぜ英語を学ばなければいけないのか、その必要性を生徒に理解してもらい、学校全体の英語力を底上げしていきたいです」と話す。

### 単位制・セメスター制にすることで 留学の受け入れ・送り出しがしやすく

また、同校では8年ほど前から単位制、セメスター制<sup>(注)</sup>を導入している。その意図として、留学のしやすさを挙げる。「留学は9月、10月からがほとんどですが、単位制・セメスター制を採用することで、受け入れ、送り出

しともに容易になります。たとえば、3学期制の場合、留学したいとなった場合に、単位をどこまで認めてあげられるかの判断が難しいですが、セメスター制の場合、前期の単位を持って留学に行くことができますし、単位互換もスムーズに進められます」

その結果、短期留学を含めると毎年各学年10名ほどが留学に行くという。留学の効果について、吉田校長は「留学に行った生徒は、短い期間であったとしても、とても成長して帰ってきます。特に中学生に至っては、語学研修旅行を通じて価値観ががらっと変わったのではないかなと思える生徒も見られます」と話す。

それらの経験からか、大学に進学してからも交換留学、自費留学をする生徒は多いという。また、2021年度は2名、2022年度は1名、2023年度は2名と、少しずつではあるが海外大に直接進学する生徒も出てきた。

グローバル教育を推進するためさまざまな取り組みを行っている同校だが、最後に吉田校長にグローバル教育にかける思いを尋ねると、次のように語ってくれた。

「グローバル人材育成のための教育は、大学からでは遅いのではないかと感じています。大学入試のための読み書き中心の受験勉強を経て、大学に入って突然グローバルな環境に対応するのは難しいのではないのでしょうか。それを考えると、高校生の期間は大切です。その期間にアカデミックな能力の育成と、多様性を受容できる環境を整えるのは、教育者としての使命だと考えています」

(注) 1年の課程を2つの学期に分けて実施する制度。

## 探究重視のグローバル教育で世界とつながる 英語資格・検定試験の活用で育む世界基準の英語力

札幌日本大学中学校・高等学校

Point

- ✓ 地に足をつけた探究活動で身につけるグローバル意識
- ✓ 世界標準のケンブリッジ英語検定は難関大合格にも寄与
- ✓ 発信活動を増やすと生徒の目が輝き、知識も定着する



英語科  
中村雄一郎 先生

### 世界に貢献する人材をめざし グローバルな視点で探究学習に取り組む

札幌日本大学中学校・高等学校は、IB（国際バカロレア）コースを持つ、グローバル教育に力を入れる私学である。開校当時からオーストラリアにある3つの姉妹校と連携したり、母体の日本大学がケンブリッジ大学と行うプログラムに生徒を派遣したりするなど、積極的に国際交流を行ってきた。そのため、2012年度にSSHに指定された際も、理科教育を中心としつつも、よりグローバルな視点で課題を発見し、解決のために研究に取り組む、探究型学習に力を入れてきたという。また、開校当初より社会におけるリーダー層の育成をめざしてきたが、SSH指定を契機に、あらためて教育目標を「世界に貢献する人材の育成」と掲げることとした。2015～2019年度にSGHの指定を受けた後、2020年度からはSGHの後継プログラムにあたる学校独自のプログラムとしてSGL（スーパーグローバル・リベラルアーツ・プログラム）を開始するなど、グローバル教育に注力し続けている。

英語科の中村雄一郎先生は「“グローバル”というと、一般的には海外での活動に偏りがちですが、本校は地に足をつけた探究活動が大切だと考えています。街頭に出てアンケートを取ったりインタビューをしたり、実際に現場に行き関係性を深めていくことが大事だと生徒たちには話しています」という。同校にはもう1つMLP（メディカルリーダー育成プログラム）という医療系の探究型学習があり、生徒はSSHを含む3つプログラムのうちから1つを選択するが、どの探究型学習でも、フィールドワークやワークショップを重視している。

### 独自ループリックを用いて深める学習の質

こうした探究的な学習を進めるため、独自のループリックを活用している<図表>。ループリックの縦軸は、「視野の広がり・社会との接続」だ。中村先生は「起点はMy project、自分の中の問題意識です。次にOur project、自分を含む自分が所属している団体レベルで問題を捉えます。その上にはWorld projectがありますが、自分たちの外の世界という意味で、必ずしも海外に目を向けるということではありません。こうして、今は自分たちと直接関係がない課題のように見えても、確実に繋がっているということに気づいてほしいのです」と話す。生徒たちはこの3つの段階を下から上に上がるだけではなく、何度も往復しながら探究を深めていく。さらに横軸には、「思考の分類」として、知識理解思考・論理分析思考・批判創造思考の3つがあり、全部で9つのブロックになる。中村先生は「最初は身の回りの課題から、徐々に視野や思考が広がっていくのですが、ブロックの中を巡り巡って、最後は自分たちに戻ってくる問題もあります。ループリックは教科学習にも応用していますが、課題探究学習の際は必ず生徒に提示しています」という。このループリックを活用した授業は同校の教育の特徴である。

### 海外姉妹校との交流が 生徒の良い刺激となる

海外姉妹校との交流では、中国・上海の姉妹校から毎年約10名が高校2年次に編入してくる。日本の大学への進学を希望しているため日本語も上手く、授業や日常

生活にまったく問題がないうえに英語もよくできる。また、国語のテストで平均点以上の点数を取る生徒も少なくない。指定校推薦の校内選考でも他の生徒と同じ土俵で競うことになるため、生徒たちに競争意識が芽生えて良い刺激にもなっている。中村先生は「編入生から、中国の英語教育がかなりプラクティカル（実用的）な形に変わっている話などを聞くと、われわれ教員にとっても刺激になります」と話す。

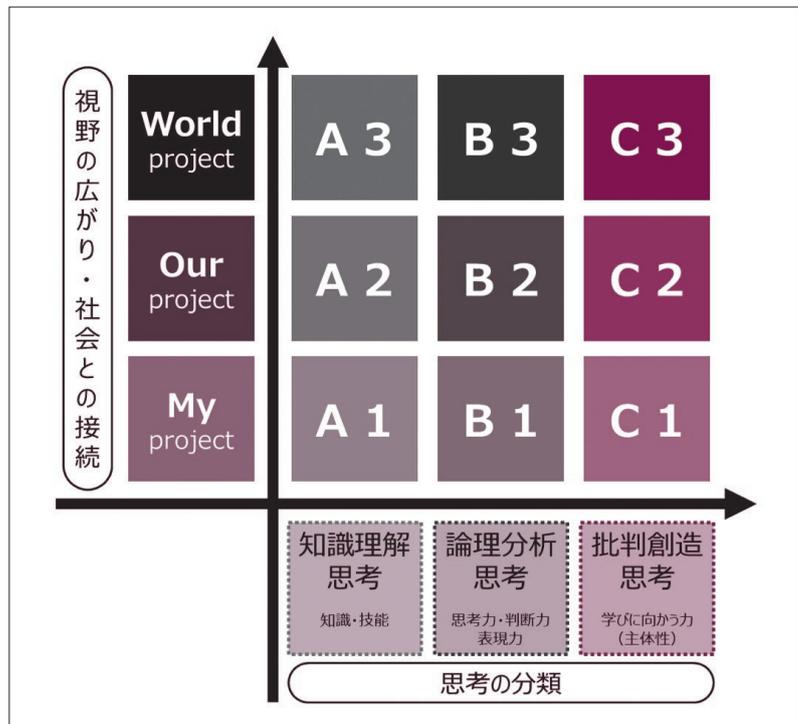
オーストラリアの姉妹校からは毎年留学生を受け入れ、多い年には20名ほどになる。同校からも研修に赴き、互いにホームステイも実施しているようだ。

中村先生は、こうした国際交流によって、生徒たちに変化が生じてきていると感じている。それは、「異なるもの」「未知なるもの」に相対したときも、生徒たちが動じなくなったことだ。「自分たちとは異なる文化を持った人たちと接するとき、まずは受け入れてみようという雰囲気生まれているように思います。その姿勢が、学園祭の準備などで出される新しいアイデアに対しても、まずはやってみようと思える受容性の高さに表れてきているように感じます」と国際交流による効果を実感している。

### 英語4技能を測る ケンブリッジ英語検定の全員受検で 授業が変わり始めた

現在、中学1年生から高校1年生までの4学年で、ケンブリッジ英語検定を全員受検している（高校2年生以降は希望者）。学年毎に受検の目安となるレベルを提示し、どのレベルを受検するかは生徒に任せている。受検を始めて8年になるが、特にListeningやReadingの結果は、意外なほど大学入試の合否結果とリンクしているという。中村先生はまだ研究途中としながらも、「ケンブリッジ英語検定は、問題の質や問われる内容が難関国立大の英語の入試問題に近いと感じています」と話し、当初は想定していなかったが、難関国立大への合格にも

図表 メタルブリック



※札幌日本大学中学校・高等学校提供

寄与すると考えている。

また、「ケンブリッジ英語検定のSpeakingは受検者が2名であり、生徒同士で作る会話形式となっている点が良いところだ」という。教員の当初の予想と違い、ListeningよりSpeakingの方がスコアが良かったそうだ。

さらに、4技能の測定を受けることで、普段の授業でも、生徒が英語で発信する活動を増やそうというムードが生まれ、実際に多くの先生方が新しい取り組みを始めている。中村先生も高校1年生に対して、被爆者についてのストーリーを要約し、「世界平和と核兵器」をテーマにした各自のキャンペーンを英語で発表させる授業を行った。発表・プレゼンテーションは、1人ずつ全員が行い、相互評価も行う。グループ学習の形式にしているため、教師が教えるのではなく生徒同士が教え合う。いわば「生徒が生徒を育てる」のだという。こうした発信活動を増やしたことで、知識の定着も向上したそうだ。「グループ学習などでアウトプットをしているときは生徒の顔が違います。目を輝かせている生徒に他の生徒も同調して、数多くの生徒がキラキラしています」と嬉しそうに語ってくれた。